

「新しい女性」の誕生とその時代的背景

——マリア・モンテッソーリと大学生活——

前之園 幸一郎

〔キーワード〕 リソルジメント, カザーティ法, リチェオ・クラッシコ,
アントーニオ・ストッパーニ, アンジェロ・チェッリ

はじめに

外国の支配的影響力のもとに国内が分断され諸邦が並存するイタリアの悲惨な国家的状況に対して、リソルジメントは民族による国家統一を旗印に国家再興運動として展開された。そのイタリア民族による新国家の理想は1870年のローマの併合によって達成されて、宿願の新生イタリア王国はついに名実共に誕生することになる。モンテッソーリは、この激動する大きな時代的転換期に成長した。彼女は女性に対する目に見えない因習的偏見が支配的な社会的状況の中で、自己の進むべき道を積極的に見定めて邁進する。本稿では当時の教育制度、とりわけ女性に対して差別的な複線型の後期中等教育ならびに大学教育の厳しい現実の中でモンテッソーリが払った自己形成の努力について考察する。

1 モンテッソーリの医学部への進路選択

マリア・モンテッソーリは1890年の秋にローマ大学に入学した。当時の女子の大学入学者の数はきわめて僅かであり、例外的な少数者に限られていた。女子の大学への受け入れを最初に規定した法令は1874年に定められたボルギ¹⁾(Borghi)法である。しかしながら実際には、イタリアにおける最初の女子の大学卒業者は1877年に卒業している。すなわち、同年にエルネスティーナ・パペール(Ernestina Paper)がフィレンツェ高等学術院(Istituto degli studi

superiori di Firenze) 医学部 (in medicina e chirurgia) の女子学生第1号として卒業した。ヴィットーレ・ラーヴァによると、この年から1902年までの25年間に、224名の女子学生が大学を卒業している²⁾。これらの女子の大学卒業生の中で、1896年に医学部を卒業したモンテッソーリを含めた11人についてみると、彼女たちは「物理・数学コース修了資格」(la licenza fisico-matematica)によって大学に進学し、その後に医学部への編入手続きを行っている。

さて、モンテッソーリは技術高等学校の卒業生であった。この学校は、医学の勉強を志す者にとっては、まったく適切さを欠く教育機関であった。その点を具体的に見てみよう。

当時の教育制度は1859年に制定された「カザーティ (Casati) 法」にもとづいていた。この法律は社会上層の子弟に対するエリート教育を骨格とする教育法であり、中等教育は明確に2つの系統の学校に分離されていた。その複線型学校制度の前者のグループは、ラテン語教育を中心としてエリート養成のために人文主義的教養が与えられるジンナシオ (Ginnasio, 5年制古典中学校)、それに接続するリチェオ・クラッシコ (Liceo classico, 3年制古典高等学校)、ならびにリチェオ・モデルノ (Liceo moderno, 3年制現代語高等学校)などの大学進学のための予備的教育を行う学校であった。後者のグループは、ラテン語履修の必要がなく実用的知識の教育が中心に与えられる3年制技術学校 (scuola tecnica)、それに接続する4年制技術高等学校 (Istituto tecnico)、ならびに3年制師範学校 (Scuola normale) などの学校からなっていた³⁾。

当然ながら後者の学校の卒業生に対しては大学への門戸は厳しく閉ざされていた。したがって大学進学のためには小学校の卒業と同時にあらかじめ将来の進路選択を行い、古典語教育中心のジンナシオに入学しなければならなかった。しかしながらモンテッソーリが小学校を終えて進学したのは技術学校であった。彼女が学んだ3年制技術学校ならびにそれに続く4年制技術高等学校の7年間の技術系コースのカリキュラムは、古典語を除く近代的な諸教科で構成されていた。技術学校の3年間のカリキュラムは、フランス語、数学、簿

記、代数学、幾何学、歴史、地理、諸科学の基礎で構成されており、それに続く4年間の技術高校のカリキュラムは、科学的・技術的な専門科目と2つの外国語から構成されていた。それではなぜモンテッソーリは袋小路になっていて大学への進学の可能性が閉ざされている学校の選択を行ったのか。その進路選択の背後にはどのような理由があったのであろうか。

その問題に入る前に1870年の新国家成立後のイタリア政府の国家的な教育方針について見ておこう。言うまでもなく国家統一を達成した新国家としての政府の緊急課題の1つは新しいイタリア国民の育成であった。初等教育の目標は、北伊から南イタリア、シチリアに至る地域的にも伝統的・文化的にも歴史的背景を大きく異にする人々を統合し、そのイタリア国民としての意識を高めることにあった。しかし、新政府は普通教育についてのみならず国家の指導者養成のための高等教育に対してもいまだ明確な教育政策を確立していなかった。19世紀から20世紀への世紀の変わり目においても、教育の問題はイタリア社会における最も深刻な課題であった。新国家の土台整備の条件にそぐわない学校制度を再編するために制定される法律や規則や省令が、互いに衝突し合って、それによる矛盾が現行の教育的秩序を混乱に陥らせていたからである。例えば、1860年から1900年の間に33人の文部大臣がそのポストに就任した。そしてそれぞれの大臣が自身の政策を実施することによって、絶えず混乱が生みだ⁴⁾されていた。一貫性のある学校制度の確立は、1923年のジェンティーレ（Gentile）改革を待たねばならない。

上のような事情から、新政府は、その時々⁵⁾の必要に応じて高等教育に関する暫定的な制度的改変を行い、教育に関する一貫した政策的方針は存在していなかった。例えば、カザーティ法公布から24年後の1883年には、女子が古典高等学校（Liceo）ならびに技術高等学校（Istituti tecnici）に進学することを認める法律が公布され、女子学生に厳しく閉じられていた門戸が開放された。さらに同1883年にバッチェッリ（Baccelli）文部大臣は、4年間の小学校教育を終了して、さらに勉学の継続を希望する女子児童はローマ市内のすべての技術学校によって受け入れることを明らかにした。バッチェッリ文部大臣のこの

措置により、幸運にも13歳のモンテッソーリは技術学校の入学試験を受験する機会に恵まれることになった。そして1884年2月に王立“ミケランジェロ・ブオナロッチィ”技術学校(Reale scuola tecnica 《Michelangelo Buonarroti》)の一年生に入学した。

ところで、モンテッソーリのこの技術学校への進学は彼女自身の希望によるものであったのか、あるいは彼女が将来従事することになると考えられる技術分野の職業と彼女の家庭の経済的条件との合致による結果であったのか、その真の理由を知ることは困難である。しかし、マッケローニなどのモンテッソーリを取り巻く親しい人々によると、少女時代のモンテッソーリは当時小市民階層の若い女の子たちにとってあたかも宿命のように受け取られていた教師という職業にだけは就きたくないと考えていた。そして技術学校への彼女の進学は、その念願どおりに教員になるための教育の路線から確かに外れていた。ところが、この選択の背後には経済的で家庭的な動機があったのではないかとの見方もある。

モンテッソーリの家族の状況に注目しよう。父親アレッサンドロ・モンテッソーリ(Alessandro Montessori)は1832年8月2日にフェッラーラ(ferrara)に生まれた。母親レニルデ・ストッパーニ(Renilde Stoppani)はアンコーナ(Ancona)県のモンサンヴィート(Monsanvito)で1840年4月24日に生まれた。この両親のもとにモンテッソーリはアンコーナ県キアラヴァッレ(Chiaravalle)で1870年8月31日に誕生した。一家は、大蔵省(Ministero delle Finanze)の役人であった父親アレッサンドロの転勤により1875年にローマに転居した。モンテッソーリの家族は3人であり、経済的には典型的な小市民階層に属していた。アレッサンドロは妻より8歳年上であり、彼が受け取る給与は通常の公務員が支給される一般的水準の額に等しいものであったと思われる。モンテッソーリが5歳までを過ごしたキアラヴァッレの彼女の生家跡の質素なたたずまいからもそのことは推察される。広場に面した集合住宅の2階にあるその旧住居は現在モンテッソーリ博物館となっているが、その建物の1階は「肉屋(macelleria)」の看板が掲げられ今日も商店となっている。

モンテッソーリが父親の意向に反して大学に進学した1890年は父親が定年を迎え年金受給者となる前年のことであつた。⁶⁾彼女の父親は、自分自身が長年にわたって勤務した大蔵省関係の部局にモンテッソーリの就職の斡旋を行うことが可能かもしれないとの考えから、多分、娘の技術学校への進学には好意的であつたと思われる。しかし、父親アレッサンドロは娘の大学進学希望には強烈に反対した。つまり、大学の数学・物理・化学・自然科学コース (ai corsi di laurea in matematica, fisica, chimica e scienze naturali) に入学するために、その前段階としての技術高等学校の技術・科学コース (indirizzo tecnico-scientifico) へ進学したいとのモンテッソーリの希望に対して父親は徹底的に反対であつた。しかし、彼女はその反対を押し切って自分の夢に向かって前進する。その決意を後押ししたのは、多分、親戚のアントーニオ・ストッパーニ (Antonio Stoppani, 1824-1891) の存在と影響があつたと思われる。

ストッパーニは、母親レニルデの叔父であり、1800年代後半のイタリアにおける傑出した科学者として、また司祭として知られて⁷⁾いた。彼は、新国家に反対するカトリック陣営の保守的論調の中で国家統一後の教会と国家の和解を訴える自主的な意見の表明者であつた。姪のモンテッソーリ誕生の時期には、彼はすでに科学的な著作を多数世に出し著明人として知られ、その画期的な著作のために高い評価を受け社会的地位を獲得していた。彼は1861年にパヴィア大学の古生物学の講座が与えられた。それは、彼の著作『ロンバルディアの古生物学』(*Paléontologie lombarde*) の出版が評判になった直後に開設されることになった講座であつた。しかし、その1年後に、ストッパーニはミラノ理工科大学ポリテクニコ (Politecnico) の高等技術学部 (Istituto tecnico superiore) への移籍を申し出た。さらにポリテクニコの分校としてフィレンツェに開設されたフィレンツェ高等学術院 (Istituto degli studi superiori di Firenze) において、1878年から1883年の間、地質学ならびに地球物理学の講座も担当した。

マリア・モンテッソーリの家庭は、前に見たように小市民階層に属してい

た。しかしそれにもかかわらず、家庭環境の文化的水準は極めて恵まれたものであった。親戚である司祭ストッパーニの存在は、若いモンテッソーリの人間形成に積極的な影響を与えずにはおかなかった。さらにモンテッソーリは、学校選択に母親の影響力が決定的であったことを自身で認めている。彼女の母親は広い教養の持ち主であり自由主義的な考えの女性であった。加えて人格的にも独創的で強固な意志の女性であった。モンテッソーリの人生において母親の存在がいかに強いものであったかは、モンテッソーリの友人の女生徒の記憶からもうかがうことができる。「私たちは、紙や書籍や図表やカードなどが雑然と積み上げられた勉強部屋に座っていたものでした。その部屋のドアは開けられたままでなければなりません。隣の食堂では堂々たる彼女の母親が読書したり、煙草を吸ったりしながら、モンテッソーリをいつも見つめていたのです⁸⁾」。

さらに、モンテッソーリが、古典中学校「ジンナシオ」、古典高等学校「リチェオ」への進学を断念して、医学部にはストレートには進学のできない技術学校、技術高等学校への道をわざわざ選んだのはなぜか。この問題について最近の研究が問題点を明らかにしている。それによると、彼女の進路選択には上述したように確かに家庭的、経済的な理由が背後にあった。しかしそれ以上に、彼女の小学校卒業時の成績が関係していたというのである。モンテッソーリは成績優秀で小学校を卒業した。しかし、その勝れた成績を以ってしても女子の古典中学への進学のためにはなお不十分であった。小市民階層の家庭の女子児童がエリート養成のための男子中心の古典的コースに入学が認められるためには、まさに例外的な超成績優秀者でなければならなかったからである。1870年から1900年までボローニャ大学に入学した女子学生についての調査⁹⁾がその点を明らかにしている。

モンテッソーリは1890年に“レオナルド・ダ・ヴィンチ”王立技術高等学校(Reale Istituto Tecnico “Leonardo da Vinci”)の技術・科学コース(indirizzo tecnico-scientifico)の物理・数学課程(sezine fisico-matematica)を好成績で修了した。そして1890年の秋に、ローマ大学の物理・数学・自然学部

(Facoltà di scienze fisiche, matematiche e naturali) の自然科学課程 (laurea in scienze naturali) に進学した。この自然科学を専攻するという選択は、大叔父ストッパーニの人格的で学問的な影響を強く受けていたに違いない。さらに、モンテッソーリの自然科学学部への進学は、古典高等学校の卒業資格を有していないという障碍を乗り越え、志望する目的の大学医学部に到達するための唯一の道であった。本来、医学部進学のためには古典高等学校 (リチェオ) の卒業資格とともに、さらにギリシア語・ラテン語の古典語の習得が不可欠の必要条件とされていたからである。しかし、自然科学部卒業のために履修しなければならない最初の2ヵ年の教科目は、医学部の最初の2ヵ年に履修するように求められている教科目とまったく同一のカリキュラムで構成されていた。この点が自然科学部から医学部への編入のための突破口となった。大学前期2年の履修科目の読み替えによって問題は解決できたからである。しかし、困難な問題として残されたのがギリシア語・ラテン語の古典語学習の問題をどう乗り越えるかの課題である。これは、モンテッソーリが独自で解決の方法を見つけ出さなければならない問題であった。

彼女は、ある親しい司祭に古典語学習の問題について相談した。その司祭は、彼が教えている神学校でのギリシア語・ラテン語の授業に彼女が出席することを許可してくれた。しかし、彼女は、その出席によって若い神学生たちが混乱しないように、木製の衝立の向こう側に隠れて、学生たちに気づかれないうように注意しながら学ばなければならなかった。このとてつもない解決策は、その後、その司祭の急逝¹⁰⁾によって中断された。

2 医学部への進学と変革拡充期のローマ大学

モンテッソーリは1892年にローマ大学物理・数学・自然学部の前期2年の修了証書を取得して、医学部に転部した。同1892年、ローマのボルゲーセ宮殿において第2回の「花祭り」が開催された。これはローマの貴族階級の女性たちによって組織された祝祭であり、花で飾られた馬車の行列がローマ市内を練り歩くお祭りであった。これにローマ大学の学生たちも招待された。参加者

たちは趣向を凝らした服をまとい、花で飾られた馬車に乗ってやって来た。なかでも、もっとも印象的だったのがマルゲリータ王妃である。王妃は、優雅さを競うコンクールの1等賞を受賞した。王妃に、賞品の絹の幟と花束を渡す名誉は、医学部の若い女子学生モンテッソーリに与えられた。ところが、王妃は、それを誰か他の人に与えて欲しいとモンテッソーリに頼んで賞を固辞された。これに対して、モンテッソーリは才気と根気強さを発揮した。彼女は、王妃を説得する適切な言葉を探し、その物柔らかな受け答えによって王妃を納得させた。王妃は、ついには喜んで若い女子学生の手から賞品を受け取られたのである。この折の、女王陛下に接するモンテッソーリの優雅な物腰と自然な態度とが世間で大きな評判となった。¹¹⁾王妃は、15年後には、「子どもの家」を頻繁に訪れる訪問者として、また、モンテッソーリは王妃を自分自身の家への賓客として迎えることになる。モンテッソーリは、この「花祭り」を機会に社会上層の人々の知遇を得た。それらの人々との関係が、その後、モンテッソーリを際立たせるものとして継続することになる。1892年のこの花の祭典に出席していた淑女たちの多くがその後も引き続きモンテッソーリの生涯において重要な役割を果たし、後援者として背後から彼女に多様な援助を行うことになったからである。

さて、モンテッソーリが大学に進学した当時、イタリアの大学は変革と拡張の真っ只中であつた。1880年から1900年の20年間にイタリアの大学生数は13,387人から26,761人に増加し、特に医学部では入学者の数が増加していた。ちなみに、1880-81年から1890-91年の10年間だけでも医学部進学者は4,000人から6,000人に増加していた。¹²⁾ローマ大学においても、1870年から1890年の間に、講義科目は文字通り3倍になり、在学生数も1875年の400人から1890年の1,600人に増大した。学部は、哲学部、数学・自然科学部、医学部、法学部の4学部が存在し、教授数は100名ほどであった。¹³⁾

大学の発展の傾向はイタリア全土で明白であり、それは上昇しつつある社会諸階層による強力な社会的圧力をも意味していた。子弟を大学に入学させることは、社会上層への魅力あるパスポートとして受けとられていたからである。

このような社会的潮流を背景に 1876 年に左翼的な第 1 次デプレティス政府が成立する。この政府は市民たちの熱望を代弁するとともに大学の見直しによる社会的発展をも目指していた。

しかし、1889 年 11 月のローマ大学入学式において学長ヴァレンティーノ・チェッルーティ (Valentino Cerruti) が述べたように、大学の整備には実験室の開設など多くの不十分な問題が残されており、それらは経済的な問題以上に研究上の前進のために深刻な懸念を生んでいた¹⁴⁾。このような状況の中で、特に医学部に関しては、医師養成についても、研究の発展に対しても注目すべき動きが見られた。医学教育充実のために優秀な教授たちならびに著名な教授たちの招聘が積極的に行われたからである。

カイローリ内閣の文部大臣に 1879 年に就任したフランチェスコ・デ・サンクティス (Francesco De sanctis) は、外国人の著名な研究者を招聘することによってイタリアの大学をヨーロッパで最も進んだものにしようと考えた。そこで同 1879 年に著名なる医学者ヤーコボ・モレシヨット (Jacob Moleschott) がトリノー大学に迎えられた。彼はトリノーでの活躍の後、ローマ大学医学部の実験生理学 (fisiologia superimentale) の講座に就任した。

1888 年にはアンジェロ・チェッリ (Angelo Celli) が実験衛生学の講座に迎えられた。1893 年にはクロドミーロ・ボンフィリ (Clodomiro Bonfigli) がローマ大学精神科病棟 (Clinica psichiatrica) の教授に就任した。これらの教員人事の拡充はそれまでの医学部の革新と理論的な前進を意味した。チェッリはマラリアについての疫学ならびにポンティーナ地方の農民たちの生活の諸条件についての研究を推し進め、モレシヨットは栄養生理学的研究やビタミン欠乏症が引き起こす病状についての究明を行い、ボンフィリはある種の精神的な病状については経済的・政治的視点に立つ解釈の必要性があることを提案した。ローマ大学医学部の教授たちは、当時の時代的雰囲気を反映して広い社会的視野に立って医学を考えた。そのようなローマ大学医学部の前進的な雰囲気の中で若いモンテッソーリは社会的問題への関心を深めていくことになる。

当時の医学は、単に疾病のみならずイタリア民衆の身体的、道徳的、社会的

再生をも視野に入れた研究の方向に進みつつあった。1902年のボローニャ大学の開講講義において、著明な臨床医アウグスト・ムッリ（Augusto Murri, 1841-1932）はイタリアの文化的、社会的発展に科学が果たすべき役割を強調して「科学のための科学ではなく、人間そのもののための科学を！」「人間の諸行動に修正を加えられない知識は、たんなる趣味的な思索となるであろう」と述べた。¹⁵⁾

さて、大学が女性に対して厳しく門戸を閉ざし、例外的に少数の女子学生を受け入れてきたことについてはすでに触れた。そのような差別的な状況の中で女子学生の受け入れに比較的に柔軟であったのが医学部であった。イタリアにおける女子の最初の大学卒業生は医学部の卒業生であり、その第1号がフィレンツェの医学部から1877年に卒業資格を授与されたエルネスティーナ・パペールであることはすでに述べた。その翌年の1878年には第2号としてトリノ大学医学部によってヴェッレダ・マリア・ファルネ（Velleda Maria Farne）¹⁶⁾が卒業資格を授与されている。当然ながら専門職の世界はきわめて閉鎖的であった。特に厳しい差別的偏見から、当時は、女性は弁護士としてはまったく受け入れられなかった。しかし、医学の世界では、一般的には閉鎖的であるにしても「女医」に対しては男性社会からの抵抗は比較的に少なかった。小児科や産婦人科は、むしろ女性の領域に属するものとして積極的ではないにしても好意的に受け入れられた。

モンテッソーリが1892年に医学部に編入して医学生としての歩みを始めたとき、すでにローマ大学医学部を2名の女子学生が卒業していた。すなわち、1890年にエドヴィージェ・ベニーニ（Edvige Benigni）が³⁾、1894年にマルチェッリーナ・コーリオ・ヴィオラ（Marcellina Corio Viola）がモンテッソーリ先輩として卒業していた。したがってモンテッソーリは、ローマ大学医学部の3番目の卒業生ということになる。¹⁷⁾さらに、モンテッソーリが1896年に大学を卒業したその年には、彼女の他に2名の女子学生がトリノ大学ならびにバヴィア大学から各1名卒業している。

モンテッソーリは1894年の大学4年のときに、成績優秀者に与えられる

ロツリ財団奨学金 (il premio della Fondazione Rolli) を受けた。これは年額 100 リラの当時としては高額の奨学金であった。しかし、その受賞は、経済的な意味以上に名誉ある学術奨励金として賞賛の対象とされるものであり、これにより彼女は性別を超えて傑出した医学生として学内に知られることになった。¹⁸⁾

3 社会的活動への関心

進歩的な教授たちの招聘によるローマ大学医学部の変革と拡充については上述した通りである。その進取の気象に富む教授たちの指導のもとで、モンテッソーリは大きな影響を受け、公衆衛生、臨床精神医学、臨床小児科学などの領域に対する彼女自身の関心を深めていく。1895 年に、モンテッソーリはチェッリ教授とパリアーニ (Pagliani L.) 教授の講義を受講した。パリアーニ教授は、トリノ大学時代のモレシヨト教授の教え子であり、第 1 次クリスピ内閣のときに内務省公衆衛生局に公衆衛生法の立案準備のために政府から招聘された。その後、ローマ大学医学部の公衆衛生学講座の教授に迎えられ、彼の教室から多くの公衆衛生の実務的な専門家が地方に送り出された。モンテッソーリは、パリアーニ教授の講義から、国家的な視野に立つ民衆に対する公衆衛生政策の重要性について学んだ。

モンテッソーリは、特にチェッリ教授の人間性と講義を通して多様な問題意識を深めることになった。彼は、イタリアの貧民階層の生活条件に着目して社会生理学の分野を開拓していた。チェッリ教授がモンテッソーリの生誕の地であるマルケ州の出身者であることも、彼女の同教授への親近感を強めていた。チェッリ教授は、1895 年の新学年度開講講演において「社会衛生学に対する失望といくつかの希望」(“Sconforto e speranze d'igiene sociale”) と題する講義を行った。その結論は、イタリアにおける極貧の社会階層に高率で発生しているマラリアや結核などの特定の疾病は経済的諸条件の変革、改善によってその撲滅も可能になるであろうという点にあった。実際、マラリアとその予防法の研究で知られるチェッリ教授は、具体的に僻地の小学校や子どもたちに対

する働きかけの活動を展開していた。彼は、アグロ・ロマーノやパルーディ・ポンティーニなどのテーベレ川上流の湿地帯に居住する農民たちの悲惨な生活条件の改善とその現状からの解放を目標としていた。その第一歩がアグロ地帯における深刻な非識字問題に対する取組であった。チェッリ教授がその運動の展開のために期待を寄せたのが「全国婦人協会ローマ支部」(La sezione romana della Unione femminile nazionale)¹⁹⁾であった。運動の成果の1つとしてアグロ・ポンティーノとパルーディ・ポンティーニに僻地学校が設立された。後に、この婦人協会の活動にモンテッソーリも参加する。

チェッリ教授は、1891年に首都ローマの貧窮家庭の子どもたちのための診療所「援助と労働」(“Soccorso e Lavoro”)を開設した。これは上記の「婦人協会ローマ支部」によって維持運営され、そのメンバーにはローマ市内の上流階級の多くの婦人たちが名を連ねていた。チェッリ教授は、また女性解放運動を重要だと考えその擁護と進展のために公的な発言を行った。それは、女性の積極的な活動によって社会的な公衆衛生の思想が普及し浸透することに期待をかけていたからであった。

モンテッソーリは、ボンフィーリ教授のローマ大学医学部精神病棟における講義によっても徹底的な影響を受けている。その講義の主題は幼児教育と精神異常がテーマとされていた。ボンフィーリ教授は遺伝的要因よりも社会的要因の重要性を強調した。彼は、幼児の道徳的感覚の確立の過程における教育の欠如と人格発展のための日常的環境の欠如が幼児の精神的異常に深くかかわっていると²⁰⁾した。ボンフィーリ教授との出会いと精神病棟における研修がモンテッソーリの生涯にわたる進路の方向性を決することになる。彼女の障害児の治療ならびに障害児教育への注目はボンフィーリ教授の強い影響力によるものであった。

モンテッソーリは、ローマ大学に新しく開設された小児科の臨床医学も修めた。この小児科臨床医学講座は、ローマのトラスターベレ地区の小児科診療所に対して協力を行っていた。その診療所は、すでに数年前からチェッリ教授によって開設され、「慈善の旗印のもとに」(soto le insegne della carità)ロー

マの上流夫人たちのグループによって運営されているものであった。その活動の内容について、「子どもたちの医師と淑女たち」(Il medico dei bambini e le signore)と題する記事が『淑女たちのための雑誌』《Rivista delle signorine》に掲載されている。それによると、子どもに対する診療活動は、公的な診療所と「救援のための診療所」の2つの診療所において行われており、その現場においては若い医師たちと教授による献身的な医療活動が熱心に展開され、それを淑女たちの物質的援助が背後から手あつく支えていた。モンテッソーリはそこに参加した若い医学生の一りであった。幼児に対するモンテッソーリの生涯にわたる真剣なまなざしは、すでに若き日のトラステーヴェレにおける診療活動によっても研ぎ澄まされたのであった。²¹⁾

すでに大学卒業の前に、モンテッソーリはローマにあるいくつかの病院の大部屋に出勤し、診療現場における実践の経験を深めていた。正確には、1895年に彼女が熱望していたサン・ジョヴァンニ (San Giovanni) 病院の助手の地位を試験によって勝ち取った。その翌年、サン・サルヴァトーレ・イン・ラテラーノ (San Salvatore in Laterano) ならびにサント・スピリト・ディ・サッシア (Santo Spirito di Sassia) 病院の医学助手としての活動をはじめた。モンテッソーリは、大学卒業の前から女医としての研鑽を積み、幼児と女性の解放のための社会改革の第一歩を踏み出そうとしていた。彼女は自身の全存在をかけて「新しい女性」の生き方を真摯に模索していたのである。

¹⁾ Valeria P. Babini, Luisa Lama, UNA 《DONNA NUOVA》 *il femminismo scientifico di Maria Montessori*, FrancoAngeli, 2007, p. 31.

²⁾ Rivà V., Le laureate in Italia, *Notizie statistiche*, Roma, Tip. Cecchini, 2 aprile 1902, pp. 634-54., from UNA 《DONNA NUOVA》, p. 31.

³⁾ Anna Laura Fadiga Zanatta, *Il sistema scolastico italiano*, il Mulino, 1976, pp. 13-14.

⁴⁾ G. Inzerillo, *Storia della politica scolastica in Italia*, Editori Riuniti, 1974, pp. 82-283.

⁵⁾ このことに関する資料は、1883年10月15日付けのイタリアの詩人ノーベ

ル賞受賞者のカルドゥッチ (Giosuè Carducci) に宛てた彼の教え子の女性 Giulia Cavallari Cantalamessa の書簡による。彼女は、バッチェッリ文部大臣が初等教育 4 年を終了してさらに勉学の継続を希望する女子生徒をローマ市内のすべての技術学校が受け入れるようにとの指示を出した《Ho letto che il Ministro Baccelli ha disposto perché in tutte le scuole tecniche di Roma si ricevano le iscrizioni delle giovinette che intendono proseguire gli studi oltre la quarta elementare》との情報をカルドゥッチに伝えて、その学校の教師のポストを得るために援助をお願いしたいと述べている。Carteggio Carducci-Canatalamessa presso l'Archivio Carducci di Bologna, from *UNA* 《DONNA NUOVA》 op. cit., pp. 31-32.

- ⁶⁾ Rita Kramer, *Maria Montessori A Biography*, Da Capo Press, 1988, p. 23.
- ⁷⁾ *Ibid.*, R. Kramer, *Maria Montessori*, p. 24
- ⁸⁾ *UNA* 《DONNA NUOVA》, op. cit., p. 34.
- ⁹⁾ *Ibid.*, p. 32.
- ¹⁰⁾ *L'Illustrazione popolare. Giornale per le famiglie* 5 marzo 1899, La medichessa Maria Montessori. Le sue strane vicende e le sue conferenze, from *UNA* 《DONNA NUOVA》, op. cit., p. 35.
- ¹¹⁾ *Ibid.*, Rita Kramer, pp. 46-47,
- ¹²⁾ Cammelli A., *Universities and professions*, in Malatesta M., (edited by) *Society and the professions in Italy, 1860-1914*, Cambridge, 1995. p. 61.
- ¹³⁾ R. Kramer, *Maria Montessori*, op. cit., p. 37.
- ¹⁴⁾ Regia Università degli Studi di Roma, Parole del rettore Prof. Valentino Cerruti lette il 4 novembre 1889 *in occasione della solenne inaugurazione degli studi*, Annuario per l'anno scolastico 1889-90, Roma, Tipografia Fratelli Pallotta, 1890, from *UNA* 《DONNA NUOVA》, p. 36.
- ¹⁵⁾ *UNA* 《DONNA NUOVA》, op. cit., p. 38. 参照。1902 年 1 月 19 日に Bologna の Archiginnasio における講義の中でムッリが発した言葉。“Non la scienza per la scienza, ma la scienza tutta per l'umanità!” “Un sapere il quale non dovesse modificare le azioni umane, diventerebbe una divertente specurazione”. Murri は脳腫瘍ならびに梅毒性疾患の研究で知られる。
- ¹⁶⁾ Soldani S. (a cura di) *L'educazione delle donne. Scuole e modelli di vita femminili nell'Italia dell'800*, Angelo, 1989, pp. 147-81. from *UNA* 《DONNA NUOVA》, op. cit., p. 38.
- ¹⁷⁾ *UNA* 《DONNA NUOVA》, op. cit., p. 38.

- ¹⁸⁾ Rita Kramer, op. cit., p. 47.
- ¹⁹⁾ *UNA «DONNA NUOVA»*, op. cit., p. 42.
- ²⁰⁾ C. Bonfigli, Dei fattori sociali della pazzia in rapporto con l'educazione infantile. Prelezione al corso di clinica psichiatrica nella reale Università di Roma. 1894. from *UNA «DONNA NUOVA»*, op. cit., p. 43.
- ²¹⁾ *UNA «DONNA NUOVA»*, op. cit., p. 44.